



写真2 Be-h@usの施工 (撮影…田村 収)

5-1. ヘッダーの設置

開口部には階高が2520・2700の時、高さ180mmのヘッダー（梁部材）を取り付けます。ヘッダー位置にしたいヘッダーを配置し、取り付ける両側の柱のボルト穴部を座金（50φ、深さ28mm）してください。

設置した両柱に「ジョイント金物 U Max-P-180」を「短い金ボルト L=100」で取り付けます。この時は上部に梁と接続するネジパイプも一緒に取り付けます。

ヘッダー位置の最上部にドリフトピンを打ち込んで、上部から両柱間に落とします。ドリフトピンがジョイント金物に当たったことを確認し、下の穴にもドリフトピンを打ち込みます。また、2P以上のヘッダーを多用する方が、強度的にも施工的にも有利です。2P以上のヘッダーを使用するときは上部の梁と繋結するためネジパイプPC-120を、上面に差し込んでドリフトピンを打ち込んでください。

5-2. 階高 2400 のときのヘッダー

階高が2400のヘッダーはOS材を使用し、下面から梁に打ち込みますので建て方が終了してから取り付けます。

Be-h@us 施工 manual V09.2.3 2004.04 Be-h@us Be-h@us 26

図3 Be-h@usマニュアル (出典…『Be-h@usの本』より転載)

無駄な空間が大きくなったのは明治時代からのものだね」「これからの内法高は2,000以上だね」……この3つの言葉だけでも、システムにとっては決定的でした。

フォルクスハウスではシステムを考えました。メーターモジュールの4mを基本とすること、階高を抑えて天井を無くす……それがフォルクスハウスの基本となりました。最大スパンは240mmの梁でギリギリとばせるから4mにしよう、プロポーションがいいしメーターモジュールでやろう、ということですね。屋根勾配は矩勾配と2種類で、4寸5分がいいか5寸がいいか迷いましたが、計算が楽だから5寸にしました【註3】。窓はなるべく少なくして7種類でいいよねと。菅波さんもプラクティカルな考え方をする人で、階高は決まっているから階段は先につくっておけばいい、というようなことがいろいろと。

工務店には「仕上げなんかするからクレームがつくんだ」と言っていましたね。幅木を付けるから幅木が曲がっていると言われる。最初から建物は壊れていい。壊れているものを壊れたと言う人はいない。そういう根源的な、もののありようみたいなところを考えたい。ものづくり方を単純にするのは藝大の影響です。吉村順三は、単純なものがいいと言うんです。

——最初に「ザ 在来」の金物や集成材を見た時に、

集成材のあらわしや金物の隙間など、従来の木造的な価値観から見て気になりませんでしたか？

秋山 旧来の木造の価値観は特に持ち合わせていなかったもので、むしろ新しい工業製品をつくるという感じでした。私は建築をつくる、MECCANO（メカノ）【註4】をつくらうと考えたのです。メカノの部品と同じようにアプリオリに最初から組立用の穴があいている……、それがシステムだと言うのですが、工務店は金物の穴を栓で塞いだりします。まだウェットな世界だなと思いましたね。ですから、窓の規格化や、なるべく少ない数にするとか、まだいろいろやることあるんですよ。合板あらわしも、昔はコンクリート打放しの家に住みたい人なんて誰もいなかったのに、今はみんな素敵だという。それならば木造打放しもあるよなと言っていました。

フォルクスハウスの発明はいろいろありますが、その一つは、4mの壁を3分割して、一つが壁で、残りに引き違いが入ったり、障子になっているところですね。障子があること自体が藝大の癖ですが。

それからあの頃は小庇も無かったんです。タツミは金物メーカーですからアルミの折り曲げは得意で、すぐつくってくれました。小庇も吉村の影響だと思います。庇があって影が深くあるのが日本の家だと教わりました。

註3 「ザ 在来」は陸屋根であったが、フォルクスハウスではOMソーラーを載せることもあり、勾配屋根を採用した

註4 20世紀初めにイギリスで開発された組立性の玩具